

少子高齢社会における新たなケアの挑戦

『世代間交流プログラムの可能性』

認知症医療とケアにパラダイムシフトをもたらすか

平成 23 年 6 月 18 日 (土)、日本老年精神医学会・聖路加看護大学老年看護学共催により、聖路加看護大学講義室において『世代間交流プログラムの可能性』をテーマに、日米で世代間交流を実践する著名な講師の方々をお招きして市民講座を開催した。参加者は一般参加者と施設ケア職員等 70 名余、および大学関係の参加者で大きな講義室が満席となった。

基調講演は、米国クリーブランドで世代間交流学校を創設したピーター J. ホワイトハウス氏（ケースウエスタンリザーヴ大学神経科学教授、聖路加看護大学臨床教授）。ホワイトハウス氏は全米名医トップ 100 にも選ばれたアルツハイマー病研究の権威である。25 年にわたる日本との関わりから、少子高齢社会への新たな挑戦・希望として、氏と夫人が創設したクリーブランド州の世代間交流スクール(The Intergenerational School: 以下 TIS)



<講演中のホワイトハウス氏>

を紹介し、認知症高齢者と子どもの生き生きした活動から、「山のよう
に考え、川のように感じる(比喩)」と、未来へ向けた叡知をコミュニティに求めることができると語った。冒頭では、今年 10 月 4 日に百寿を迎えた日野原重明理事長から挨拶があり、自身の「いのちの授業」を通して子ども達に伝える一番大事なことは、自分だけのためではなく、家族や友達など、他の人のために何かができる人間になることと、ホワイトハウス氏の活動にエールを送り、握手をかわされた。



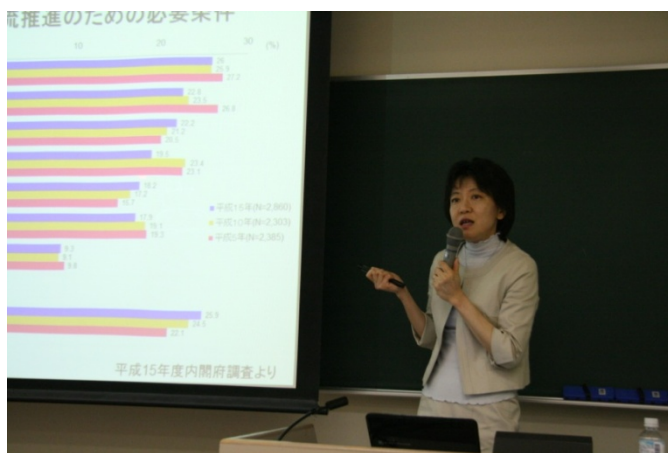
<ホワイトハウス氏との握手>



へサクセスフルエイジングの象徴
日野原理事長の挨拶
へ

第二部では、国内における取り組みとして、聖路加看護大学老年看護学の亀井智子教授、筑波大学大学院の朝田隆教授の講演があった。

亀井教授からは国内の様々な世代間交流支援の実践について紹介の後、都市部在住高齢者（虚弱・独居・認知症高齢者含む）へ向けた世代間交流プログラム実践の具体例として、“聖路加和みの会”の取り組みと成果が講演された。看護アセスメントに基づき、参加高齢者の個別性に合わせた援助を行いながらプログラム運営と、小中学生との交流の場が設定されていること、高齢者の抑うつへの効果や「お年寄りを大切にしたいと思った」など子どもへの高齢者への理解が示されていること等が述べられた。



<講演中の亀井教授>



<講演中の朝田教授>

朝田教授からは、「認知症高齢者のパラダイムシフト」として、認知症を支える医療理念と財源、特に高齢人口の増加に伴い認知症高齢者数も増えて行く現状から地域での取り組み、認知症専門医らによる地域連携のあり方について講演された。つくば市の“つくば認知症ネットワーク”は地域包括支援センターやコメディカルが協働し、またハイテク産業からロボットスーツによって介助する側の身体機能拡張



<会場からの質問に答える教授陣>

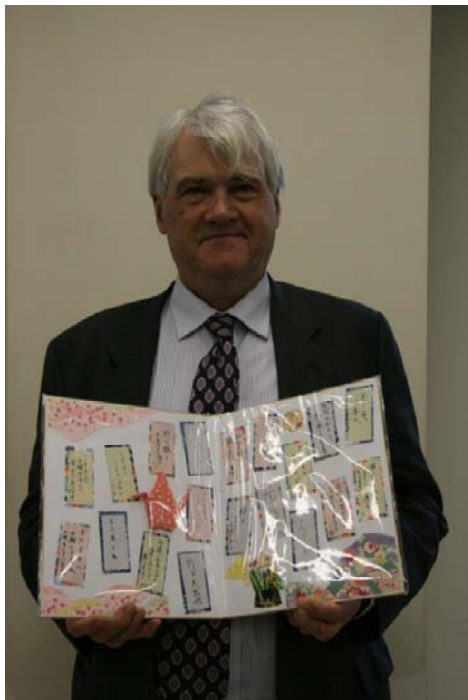
による活動拡大といった、少子高齢化先進国として未来産業型ケアモデルを考える紹介もあり、医療と介護、家庭と地域連携の推進、世代間交流と共生などについて語られた。

第三部では、3人の演者への質疑応答のセッションを持った。



<TIS 取り組みへの率直な質問が飛び交い、熱気あふれる会場の様子>

また、講演の途中で、聖路加和みの会の参加者の製作による、手作りの色紙がホワイトハウス氏へ贈呈された。さらに、米国の高齢者による折り紙活動の作品が紹介と展示があった。現在、日米においてそれぞれ折り紙製作活動が世代間交流場面で行われており、海を越えた日米高齢者の文化交流が続いている。参加者のアンケート結果からは非常に高い満足度が示された講座となった。



<贈呈された色紙を手にする
ホワイトハウス教授>



<聖路加和みの会スタッフより贈呈と握手>



<米国 TIS ボランティアによる紙のオブジェ>